

まえがき

1853年以前の日本関係欧文図書出版史

「日本について、我々がこの地で経験したことから得た知識を貴殿に伝えよう。まず、これまで会話した人々は、今までに発見した中で最も善良であり、異教徒の国民の間で日本人より優秀な人々は見つからないように思える」。これはザビエルがゴアにいるイエズス会士に宛てた1549年11月5日付の書簡における日本の第一印象を語ったものである。同書簡の中でザビエルは日本の一般民衆の性質や慣習、宗教などについての見聞を記している。ザビエルの記述は日本に対する好奇心に満ちており、鋭い観察力も見られ、他の地域・民族との違いが強調され、異国趣味への傾向も顕著に見出される。また、日本人について、質素な生活を送り、勤勉で正直、善良な民族であるとしながらも、他方では、戦争を好み、邪悪な宗教に加担しているとの批判も見られる。このような矛盾を含有する日本観はザビエル以降も日本関係記述における不変的な要素となる。

ザビエルの日本関連書簡は、イタリア語、ラテン語、フランス語、英語など多くの言語に訳され、ザビエル単独の書簡集として出版されるだけでなく、インドや日本で活動したイエズス会士の報告集にも抜粋された形で常に掲載され¹、ヨーロッパに広く普及し、西洋における日本観形成の起点となった。また、ザビエルの死後に彼についての多くの伝記が出版されたが、それらのザビエル伝の中に伝記作者による日本や日本人、日本文化に関する詳細な記述が掲載されているものも多いことから²、ザビエルの偉業が日本文化の諸相と本質的に結び付けて捉えられていたことが分かる。

以後、日本に続々と来航したイエズス会士達もまた毎年のように日本での宣教活動に関する報告書を、ザビエルの書簡を模範として、書簡の形で上司やイエズス会本部へ送った。これらの報告書はローマでイタリア語へ訳された上で、教皇の許可の下でイタリア各地の出版社によって2～3年おきに出版された。1550年代後半から1560年代にかけてヴェネツィアの出版者

1 ザビエル単独の書簡集としては、*Francisci Xaverii epistolarum libri quatuor*, 1604; *Lettres du B. Pere Saint Francois Xavier*, 1628; *S. Francisci Xaverii e Societate Iesv, Indiarum apostoli nouarum epistolarum libri septem*, 1667などがある。ザビエルの書簡が掲載されているイエズス会報告集としては *Jesuits: Epistolae Japonicae*, 1570; *Jesuits: Rerum a societate iesu in oriente gestarum*, 1574; Giovanni Pietro Maffei: *Selectarum epistolarum ex India libri quatuor*, 1588. などがある。

2 Orazio Torsellino: *Vita del B. Francesco Saverio*, 1605; Daniello Bartoli: *De vita, et gestis S. Francisci Xaverii*, 1666; Dominique Bouhours: *La vie de Saint François Xavier*, 1682.

ミシェル・トラメジーノが複数の報告集を出版し³、1580年代以降はイエズス会と深い関係を持っていたローマのザネッティ家が多くの報告集の出版を手掛け、刊行頻度がさらに増した。ザネッティ家によって出版された報告集は同時にミラノやブレシア、ヴェネツィアの出版者によっても再版されていたので、各報告集について複数の版が存在し、すべて合わせると膨大な量に上る。日本のみを扱った報告集もあれば、イエズス会士が活動していた東西インド（アジア・アメリカ）やアフリカの各地からの報告書が編纂されたものも多く見られる。16世紀にはこれらの「インド報告集」の中で日本についての記述に割り当てられた分量が常に群を抜いていた。イタリアで刊行された報告集はフランス語、ドイツ語、スペイン語、オランダ語などに訳され、新しい日本情報が僅か1~2年の差でヨーロッパ各地の読者に届いた。当時は帆船による運搬手段しかなかったことから勘案すると、驚くべき情報伝達の速さである。

また、1560年代以降に、それまでの日本関係報告書がラテン語で編纂された集大成も刊行されるようになった。これらの集大成を最初に手掛けたのはルーヴェンの出版者ロットゲルス・ヴェルピユスであり、1569年および1570年に続けて刊行された⁴。さらに、イタリアではイエズス会の歴史家ジオヴァンニ・ピエトロ・マッフェイもまたアジアから寄せられたイエズス会士の報告書を元に『インド史』（ヴェネチア、1589年）を著し、イエズス会士の書簡の選集と合冊して刊行している⁵。このマッフェイの著作はイタリア語版⁶やドイツ語版⁷も存在する。また、17世紀に入ってからスコットランドのイエズス会士ジョン・ヘイが1577~1601年のイエズス会士の書簡のラテン語訳を掲載した『イエズス会書簡集』（アントワープ、1605年）を刊行している⁸。その中でもルイス・フロイスによる日本におけるキリスト教宣教活動や当時の日本の政治事情に関する長編の書簡が多く紙面を占めている。これらの図書はラテン語で書かれたため、プロテスタント圏を含む全ヨーロッパの知識人に普及し、イエズス会の日本情報を広く伝えた功績がある。さらに、ルイス・デ・グズマンがスペイン語で『東方伝道史』（アルカラ、1601年）を刊行し、その中に所収されている日本に関する詳細かつ包括的な記述はラテン語圏の諸国において大きな影響力を及ぼした⁹。

イエズス会士の報告書の内容は、その性質上もっぱら布教活動に集中したものである。従って、この報告書を元にヨーロッパにおいてイエズス会の歴史家達が「日本史」を著す際にも、

3 Jesuits: *Diversi avisi particolari dall' Indie di Portogallo*, 1558; Jesuits: *Nuovi avisi dell' Indie di Portogallo*, 1559; Jesuits: *Nuovi avisi delle Indie di Portogallo*, 1565.

4 Jesuits: *Epistolae Japonicae*, 1569; *Epistolae Japonicae*, 1570; *Epistolae Indicae et Japonicae*, 1570.

5 Giovanni Pietro Maffei: *Io Petri Maffei Bergomatis e Societate Iesu historiarum Indicarum libri XVI*, 1589.

6 Giovanni Pietro Maffei: *Le historie delle Indie orientali*, 1589.

7 Giovanni Pietro Maffei: *Kurtze Verzeichnus und historische Beschreibung*, 1586.

8 John Hay: *De rebus Japonicis, Indicis, et Peruanis epistolae recentiores*, 1605.

9 日文研は1891年にビルボアで刊行された復刻版を所蔵している。

その著作は「日本におけるキリスト教布教史」としての位置づけであった。しかし、そうした記述の合間に当時の日本の政治状況についての詳細な記述も見られる。また、日本人の気質や慣習、社会、宗教、文化などについても豊富な情報が含まれている。それらの情報はキリスト教の布教に役立たせるためのものでありながらも、イエズス会士自らの異文化に対する感嘆や興味の側面も濃厚に表現されている。特に初期の報告書において、日本および日本におけるイエズス会士の活動がかなり美化された形で記述されているように見受けられる。このような報告書における記述と現実との差に初めて気づいたのは巡察師ヴァリニャーノであった。ヴァリニャーノの報告書もまた複数の言語で出版されたが¹⁰、彼はその中で布教活動の実態についてより現実的な概観を示そうとした。そのためか、彼の報告には特に日本と西洋の文化の違いが強調されるようになり、そうした記述には日本文化への憧れも時折見え隠れしている。ヴァリニャーノの日本渡航以降、フロイスを初めとする宣教師による日本報告は毎年イエズス会本部に送られ、それらが毎年出版されることにより、次第に当時の日本の状況に関する詳細な情報がヨーロッパの読者に定期的に提供されるようになった¹¹。

ヨーロッパ人の日本に対する興味が大きく刺激されたのは、ヴァリニャーノが企画した天正少年遣欧使節団の到来時である。1585年に行われた天正遣欧使節のローマ教皇グレゴリウス13世への謁見を記念して、その公式な記録として『枢機卿会公報』が同年にローマでザネッティにより出版された¹²。同書の刊行をきっかけに各国で天正遣欧使節について数え切れないほど多くの出版物が出された。中でも、天正少年遣欧使節がローマに到着してから、法王グレゴリオ13世との謁見の後にイタリアから出発するまでの様子についてイタリア人の知識人ガイド・グワリティエリが記録した『天正少年遣欧使節記』の出版は、当時のヨーロッパにおける日本像の形成に大きな影響を与えた¹³。なお、教皇グレゴリオ13世の事績を讃える伝記としてチャッピによって1596年に出版された『グレゴリオ13世伝』には、5葉の日本関連の木版画が掲載されており、その内の1葉は天正遣欧使節の教皇謁見の様子が描かれたものであり、ヨーロッパ人が日本人を視覚的に認識する初期の試みの一つであった¹⁴。

この時期に日本ではキリシタン弾圧がすでに始まっていたが、1600年代初めのゲレーロなどのイエズス会士の年次報告書の記述には、これらの苦難を布教が乗り越えられるという希望が

10 Alessandro Valignano: *Nouveaux advis de l'estat du christianisme es pays et royaumes des Indes Orientales & Japon*, 1582.

11 Luís Fróis: *Nova relatio historica de statu rei christianae in Japonia*, 1598.

12 Gaspar Gonsalvez: *Acta consistorii publice exhibitae a S.D.N. Gregorio Papa XIII*, 1585.

13 Guido Gualtieri: *Relationi della venuta de gli ambasciatori Giaponesi*, 1586; Guido Gualtieri: *Neue, warhafftige, aussführliche Beschreibung, der Jüngstabgesandten Japonischen Legation*, 1587.

14 Marcantonio Ciappi: *Compendio delle heroiche et gloriose attioni, et Santa vita di Papa Greg XIII*, 1596.

見られる¹⁵。布教の将来は時の為政者にかかっていたため、秀吉の死から大坂の陣までの間の時期の政治的な出来事に関する情報が綿密に集められ、ヨーロッパへ詳細に伝えられた。しかし、1615年以降、日本におけるキリシタン弾圧が強くなるにつれて、カトリック読者の関心は日本人・日本文化から次第に殉教の方に移ってしまう。この時期に刊行された殉教者の列伝が数えきれないほど多く存在する。代表的な著作としてピネイロ『日本新史』¹⁶やニコラ・トリゴー『日本におけるキリスト教の勝利』¹⁷、カルディム『日本殉教精華』¹⁸などが挙げられる。特に『日本殉教精華』には宣教師や日本人キリシタンそれぞれの殉教の場面を劇的に描いた87枚の銅版画が挿入されているのが目を引く。これらの著作は、日本におけるキリスト教布教史についての概説の他に各殉教者の伝記を連ねて掲載したもので、日本文化そのものからはかけ離れた内容となっている。

17世紀初期からイエズス会士以外によって著された日本関係図書も出現する。日本での布教経験があったフランシスコ会士マルセロ・デ・リバデネイラによる『フィリピン史』が1601年にバルセロナで刊行された¹⁹。同書には、日本におけるフランシスコ会の活動開始時から1597年における日本26聖人の殉教までの出来事に関する詳細な記録が所収されている。また、日本の文化や社会、宗教などについての情報も豊富に含まれている。なお、この時期にヨーロッパ人が日本に関する最新情報に接するきっかけを与えたのはフランシスコ会士ルイス・ソテロが企画した慶長遣欧使節のローマ到着であった。1615年にローマで刊行された『伊達政宗慶長遣欧使節記』²⁰は、イタリアの知識人シピオーネ・アマティによる慶長遣欧使節についての記録である。6ヶ月間にわたって通訳兼交渉役としてこの慶長遣欧使節に随行したアマティ本人によって記録された同書には、使節派遣の経緯から現地での使節の滞在記録まで、詳細かつ貴重な情報が豊富に掲載されている。さらに、同書には仙台藩についての当時あまり見られない貴重な情報も多く含まれている。

ところで、このような宣教師による日本報告はキリスト教会の「教化」を目的とした利用のみに留まっていたわけではなかった。17世紀においてイタリアの知識人もそれらの日本情報を受容し、自らの理論書に挿入していた。イエズス会の教育を受けていたイタリアの知識人ジョヴァンニ・ボテロは1590年代にローマおよびヴェネチアで『世界誌』を刊行した²¹。同書に

15 Fernan Guerrero: *Relacion anual de las cosas que han hecho los padres de la Compañia de Jesus en la India Oriental y Iapon*, 1604.

16 Luiz Pinheiro: *Relacion del sucesso que tuvo nuestra Sanra Fe en los reynos del Iapon*, 1617.

17 Nicolas Trigault: *De Christianis apud Iaponios triumphis*, 1623.

18 Antonio Francisco Cardim: *Fasciculus e Iapponicis floribus*, 1646.

19 日文研は1947年にマドリードで刊行された復刻版を所蔵している。

20 Scipione Amati: *Historia del regno di Voxv del Giappone*, 1615.

おける日本関係記述は布教の側面には深入りせず、もっぱら日本の国制を研究の対象としている。次に、フランスの文人ピエール・ダヴィティにより1613年に刊行された豪華なフォリオ版『世界帝国誌』所収の「日本王国志」もイエズス会士の報告集を典拠に日本の政治・文化・社会についての概観を提供しており、その中には学識水準の高い内容も含まれている。『世界帝国誌』はその後も増補修正を重ね、ダヴィティの死後にフランス王に仕えていた歴史編纂者ロコレによって完成され、1660年に7冊本として出版された²²。また、『世界帝国誌』の初版を底本としているオランダ語版『世界鏡』も1621年にアムステルダムで出版されている²³。

オランダ語で日本に関する初めての包括的な記述が提供されたのはヤン・ホイヘン・ファン・リンスホーテン『東方案内記』（アムステルダム、1596年）を通じてであった²⁴。この著作はアジア諸国に関する豊富な情報をオランダ人にもたらした。その中で日本についても一章が設けられて、日本の様々な事柄について詳細に記述されている。リンスホーテンは日本に渡航したことがなかったので、日本に関する情報は、マッフェイ『インド史』などのイエズス会士の著述の他に、彼が永らく滞在していたゴアで収集したものであると推測される。『東方案内記』は英語版やラテン語版、フランス語版も刊行され、広く普及した。続いて、1601年にロッテルダムで出版されたオリフィール・ファン・ノールト『世界一周紀行』にはオランダ人と日本人の出会いについての最初の記録が見出される²⁵。オランダ人海賊であったファン・ノールトは1600年にマニラ近くで日本船と出会い、日本人の船長との会話を航海日誌に記録している。この日誌および日本人と日本船を描いた二枚の図版が『世界一周紀行』に収録されている。同書はフランス語、ドイツ語、英語、ラテン語など複数の言語に訳され、広く読まれた。

オランダ東インド会社は1609年に日本へ初めて船を派遣し、平戸で商館を設立したにもかかわらず、17世紀の前半にはプロテスタント諸国へ向けた日本に関する情報伝達が途絶えた。この状態を打開したのは1645年にアムステルダムで出版されたコメリンの『東インド会社の起源と発展』であった²⁶。同書に所収されている東インド会社商務員の複数の参府日記は、「内」

21 国際日本文化研究センターは1603年のスペイン語版 Giovanni Botero: *Relaciones universales* および1671年のイタリア語版 *Relationi universali* を所蔵している。

22 国際日本文化研究センターはその中で「アジア誌」Pierre d'Avity: *Description generale de l'Asie*, 1660 を所蔵している。

23 Pierre d'Avity: *Wereld spiegel*, 1621.

24 国際日本文化研究センターは1598年にロンドンで出版された英語版を所蔵している。Jan Huygen van Linschoten: *His discours of voyages into the easte & west indies*, 1598.

25 国際日本文化研究センターは1610年にアムステルダムで出版されたフランス語版を所蔵している。Olivier van Noort: *Description du penible voyage fait entour de l'univers ou globe terrestre*, 1610.

26 国際日本文化研究センターは第二版 Isaac Commelin, *Begin ende voortgangh, van de Vereenighde Nederlantsche Geoctroyeerde Oost-Indische Compagnie*, 1646. を所蔵している。

から実見した日本および日本人についての観察記録としてオランダ人読者に新たな情報を提供した。また、この他に、同書に所収されている東インド会社文書の中にカロンによる日本報告書も含まれる。同報告書は日本の文化や社会について包括的に記述されたもので、宗教的観点を排除した形で、見聞したままに記録されている。なお、『東インド会社の起源と発展』はフランス語に訳された²⁷ものの、オランダ以外のヨーロッパ諸国への影響力は少なかったようである。それに対して、カロンの報告書は『日本大王国志』の題で1648年に単著としてアムステルダムで出版され、英語版、ドイツ語版なども出されたため、より広い読者層に読まれるようになった²⁸。また、全ヨーロッパの知識人を対象に出版されたベルンハルドゥス・ヴァレニウス『日本王国誌』（アムステルダム、1649年）の内容もカロンの報告書に大きく依拠している²⁹。さらに、アジアの諸宗教について論じたオランダの牧師ゴドフリーデゥス・カロリヌスの『現代の異教』（アムステルダム、1661年）も日本の宗教についての解説においてイエズス会士報告集の他にカロンの記述を多いに参照している³⁰。

17世紀のオランダ人による日本記録は一貫して臨場感に溢れたものとなっている。これらの記録の読者はまるで東インド会社の職員と一緒に日本を旅しているような気分になる。モンターヌスの『東インド会社遣日使節紀行』（アムステルダム、1669年）は質と量の両面においてこの時期の日本情報伝達水準の頂点に達したと言えるものである³¹。同書は1650～1660年代における東インド会社職員による複数の江戸参府日記を編纂したもので、当時のヨーロッパに存在していた日本についての情報を網羅的に盛り込んでおり、初めての本格的な「日本誌」となった。また、多くの図版も挿入されている。これらの図版は日本に渡航した経験のない絵師によってテキストを参考に作成されたため、写実性に欠けるが、ある程度の正確さが認められる。これらの図版は代替物の欠如のために以後長きにわたってヨーロッパ人が持つ日本についての視覚的イメージを形成した。同書は英語やフランス語、ドイツ語に訳され、17世紀後半のヨーロッパにおける日本に関する基本的参考書となった³²。例えば、フランスの百科全書作家ルイ・モレリはその『歴史大事典』（アムステルダム、1694年）の「日本」項において、前述のマッフエイ『インド史』の他にモンターヌスを典拠としている³³。モンターヌスの図版もま

27 Constantin de Renneville: *Recueil des voyages*, 1725.

28 François Caron: *Beschrijvinghe van het machtigh coninckrijcke Japan*, 1648.

29 Bernhardus Varenius: *Descriptio regni Japoniae*, 1649.

30 Godefridus Carolinus: *Het hedendaagsche heidendom in Asia, Africa en Europa*, 1661.

31 Arnoldus Montanus, *Gedenkwaerdige gesantschappen der Oost-Indische Maetschappy*, 1669.

32 Arnoldus Montanus: *Atlas Japannensis*, 1670; Arnoldus Montanus: *Denckwürdige Gesantschafften der Ost-Indischen Gesellschaft in den Vereinigten Niederländern, an unterschiedliche Keyser von Japan*, 1670; Arnoldus Montanus: *Ambassades mémorables de la Compagnie des Indes Orientales des Provinces Unies, vers les Empereurs du Japon*, 1680.

33 Louis Moréri: *Le grand dictionnaire historique*, 1694.

た後に出版された多くの日本関係欧文図書に転写されている。

『東インド会社遣日使節紀行』刊行以後、オランダ商館を媒介とした日本に関する新たな情報の流入量は減少する。とはいえ、ヨーロッパで空前のベストセラーとなった『三大旅行記』（アムステルダム、1676年）において、その著者である冒険家ヤン・ストライスは1650年に訪れた長崎について、僅かではあるが、鮮やかな記述を掲載している³⁴。また、同時代のもう一人の冒険家ワウテル・スハウテンは『東インド紀行』を著したが、日本にまではたどり着くことができなかつたため、その著書に掲載されている日本関係記述はバタフィアで得た情報および既存の日本関係欧文図書から編纂されたものである³⁵。なお、1724年にドルドレヒトで出版されたフランソワ・ファーレンテイン『新旧東インド』の第5巻に1609年から1700年頃までの日本関係東インド会社文書の翻刻や要約が数多く編纂されているが、同書はオランダ語で書かれていたため、ヨーロッパにおいて大きな影響を及ぼすまでには至らなかつた³⁶。

17世紀後半に、それまでに出版された日本関係図書における情報が博学書に利用されるようになる。当時の代表的な博学書はエラスムス・フランシシの『東西インド・シナ庭園』（ニュルンベルク、1668年刊）³⁷および『海外諸国歴史芸術風俗新鏡』（ニュルンベルク、1670年刊）³⁸である。ドイツ最初の職業作家と言われるフランシシは、17世紀後半のドイツ上流階級の博学趣向に合わせて、同書において東西インドに関する地理、歴史、植物、動物、民族、慣習などについての様々な珍奇な話を編纂している。日本についても膨大な量の情報が掲載されている。また、このような日本情報を博学の対象として整理し、その中の面白い話を読者の娯楽のために提供したオランダの著作としてユトレヒトの職業作家シモン・デ・フリースの『東西インド奇事詳解』（ユトレヒト、1682年）が挙げられる³⁹。フランシシの著作がドイツの上流階級を対象として書かれていたのに対して、デ・フリースはオランダの中流階級に広い読者層を持っていた。ただ、それまで出版された報告書や旅行記がありのままの見聞を伝えていたのに対して、このような博学書の刊行によって、日本情報が西洋の思想的枠組みの中で異質なものととして相対化されてしまうようになり、それまでのイエズス会士やオランダ商館員の記述から伝わる日本に対する親近感が希薄化するようになった。

34 国際日本文化研究センターでは英語版 Jan Janszoon Struys: *The perillous and most unhappy voyages of John Struys*, 1683およびフランス語版 Jan Janszoon Struys: *Les voyages de Jean Struys*, 1718を所蔵している。

35 Wouter Schouten: *Oost-Indische voyagie*, 1676; Wouter Schouten: *Reistogt naar en door Oostindiën*, 1775.

36 François Valentijn: *Oud en nieuw Oost-Indiën*, 1724.

37 Erasmus Franciscus: *Ost-und West-Indischer wie auch Sinesischer Lust-und Stats-Garten*, 1668.

38 Erasmus Franciscus: *Neu-polirter Geschicht-Kunst-und Sitten-Spiegel ausländischer Völcker*, 1670.

39 Simon de Vries: *Curieuse aenmerckingen der bysonderste Oost en West-Indische verwonderens-waerdige dingen*, 1682.

この「博学的な」傾向はケンペルの著作においてよりいっそう顕著に表れ、18世紀以降、日本情報は学者によって扱われる領域となった。オランダ東インド会社の職員として1690年に日本に渡航したドイツの医師ケンペルは、2年間の勤務の後にヨーロッパへ戻った。日本滞在中、多くの日本側資料を収集し、それらを熱心に研究したケンペルが著した原稿の英語訳は『日本史』の題で彼の死後の1727年にロンドンで出版された⁴⁰。この著作によりそれまでにはなかった日本の地理や歴史、宗教などの学問的な研究が初めてヨーロッパの知識人に提供され、ヨーロッパにおいて日本学の基本的参考書となった。1729年にはフランス語版も世に出て、フランス語圏の知識人の間に広い読者層を獲得し、その影響は特に啓蒙主義者達の間に入り、宗教や国政、政治などの日本学を越えた分野における学術的な議論にまで発展した⁴¹。中でもシャルル・ド・モンテスキューが『法の精神』（ジュネーヴ、1748年）を著す時に利用したことはよく知られている⁴²。他にもオランダ語やドイツ語に翻訳・増補され、ヨーロッパで広く読まれたイギリス人の歴史家トーマス・サーモン『万国史』（ロンドン、1739年）における日本関係記述も同書を典拠としている⁴³。なお、1775年に日本に渡航したスウェーデンの植物学者カール・ペーテル・ツンベリはその著書『ヨーロッパ・アジア・アフリカ紀行』（ウプサラ、1788年～1793年）における日本文化関連記述の中でケンペル『日本史』から多くの記述を転写している⁴⁴。ツンベリは出島オランダ商館で外科医として勤めながら、日本の動植物を調査し、スウェーデンに帰国後、ウプサラ大学教授として、その研究成果を『スウェーデン王立アカデミー自然哲学・科学・家政学・工学新論集』（ライプツィヒ、1780年～1790年）に定期的に投稿し⁴⁵、また、『日本植物誌』（ライプツィヒ、1784年）をも上梓した⁴⁶。

一方で、イエズス会士の著作にもこの時期に日本関連記述の復興が見られる。フランスのイエズス会士ジャン・クラセが1689年にパリで刊行した『日本教会史』は、その題目の通り、日本におけるキリスト教布教史を扱っているが、巻頭には日本に関する概説も掲載されている

40 Engelbert Kaempfer: *The history of Japan*, 1727.

41 Engelbert Kaempfer: *Histoire naturelle, civile, et ecclesiastique de l'Empire du Japon*, 1729.

42 国際日本文化研究センターは1767年刊の全集を所蔵している。Charles de Secondat Montesquieu: *Oeuvres de Monsieur de Montesquieu*, 1767.

43 国際日本文化研究センターはオランダ語版 Thomas Salmon: *Hedendaagsche historie, of tegenwoordige staat van alle volkeren*, 1736およびドイツ語版 Thomas Salmon: *Der heutigen Historie oder des gegenwärtigen Staats aller Nationen*, 1733ならびにイタリア語版 Thomas Salmon: *Lo stato presente di tutti i paesi e popoli del mondo*, 1734を所蔵している。オランダ語版とその翻訳であるドイツ語版およびイタリア語版の増補には主に前述のファーレンテインが利用されている。

44 Carl Peter Thunberg: *Resa uti Europa, Africa, Asia*, 1788; *Voyage en Afrique et en Asie, principalement au Japon, pendant les années 1770-1779*, 1794; *Travels in Europe, Africa, and Asia*, 1795.

45 Königlich. Schwedischen Akademie der Wissenschaften: *Neue Abhandlungen, aus der Naturlehre, Haushaltungskunst und Mechanik*, 1780-1790.

46 Carl Peter Thunberg: *Flora Japonica*, 1784.

る⁴⁷。同書は英語版やイタリア語版、ドイツ語版も出た⁴⁸。なお、フランスの哲学者ピエール・ベイユが著した大著『歴史批評事典』（アムステルダム、1697年）における「日本」項に掲載されている日本の宗教・思想に関する記述については、主にこのクラセを典拠としている⁴⁹。また、この少し後の時期に同じくフランスのイエズス会士ピーエル・フランソワ・ザビエル・シャルレヴォアが『日本史』を著している。同書は元々1714年にルーアンで出版されたが、1736年に増補改訂版が出ている⁵⁰。シャルレヴォアの『日本史』は、他のイエズス会士の著した「日本史」と同様にキリスト教布教史を中心的なテーマとして扱いつつも、ケンペルの著作に対抗する目的でカトリックの視点から見た日本の文化や社会に関する総括的な記述も掲載している。同書は「教化」目的で版を重ね、フランスのカトリック界を中心にその日本観の形成に多大な影響を与えた⁵¹。フランスの聖職者ピエール・クロード・ル・ジュヌは『日本および日本人に関する批評的・思想的観察』を書き上げるにあたって主にこのシャルレヴォア『日本史』を典拠としている⁵²。

1704年にロンドンで『台湾誌』と題する図書が出版された⁵³。著者はフランス人でありながら、自ら台湾人であると偽っていたプサルマナザールと称する人物であった。その題目の通り、主に台湾について記述されているが、その著作の中では、台湾人の祖先が日本人であり、台湾が日本の属国であるとされていることから、日本についての記述も多い。プサルマナザールはイエズス会士の報告集を参照してはいるが、架空の作り話も多く含まれており、中でも、出島商館のオランダ人が踏絵の儀式に参加しているという記述を信じ込んだヨーロッパ人が少なくなかった。すでにフランスの冒険家ジャン・バティスト・タヴェルニエはその『六旅行記付録見聞記』（パリ、1679年刊）の中でオランダ人によるキリシタン弾圧への協力を強烈に批判していた⁵⁴。こうした批判に反論するためにファン・ハーレンというオランダの文人が

47 国際日本文化研究センターは1691年版および1715年版を所蔵している。Jean Crasset: *Histoire de l'église du Japon*, 1691.

48 Jean Crasset: *The history of the church of Japan*, 1704; *La storia della chiesa del Giappone*, 1722; *Ausführliche Geschichte der in dem äussersten Welt-Theil gelegenen Japonesischen Kirch*, 1738.

49 国際日本文化研究センターは1720年に刊行された第3版を所蔵している。Pierre Bayle: *Dictionnaire historique et critique*, 1720.

50 Pierre-François-Xavier de Charlevoix: *Histoire de l'établissement, des progress et de la décadence du christianisme dans l'empire du Japon*, 1715; Pierre-François-Xavier de Charlevoix: *Histoire et description generale du Japon*, 1736.

51 Pierre-François-Xavier de Charlevoix: *Histoire du Japon*, 1754; *Histoire de l'établissement, des progrès et de la décadence du christianisme dans l'empire du Japon*, 1828; *Histoire du christianisme au Japon*, 1828; *Histoire et description du Japon*, 1839; *Histoire et description du Japon*, 1847.

52 Pierre Claude Le Jeune: *Observations critiques et philosophiques, sur le Japon, et sur les Japonnais*, 1780.

53 George Psalmanazar: *An historical and geographical description of Formosa*, 1704; *Description de l'île Formosa en Asie*, 1705.

54 Jean-Baptiste Tavernier: *Recueil de plusieurs relations et traitez singuliers & curieux*, 1679.

筆を執り、『日本論』（ズウォレ、1775年）という著作を上梓した⁵⁵。同書の中でファン・ハーレンは既存の日本関連図書の内容を東インド会社文書の内容と比較し、オランダ人の潔白を証明しようとした。1778年にパリでフランス語版も出たが、オランダ人の日本貿易独占に対する他のヨーロッパ人が抱く不満や不信感を払拭するには至らなかった⁵⁶。

18世紀末になると、オランダ船以外のヨーロッパの船が続々と日本近海に入り込むようになる。1771年にハンガリー出身の冒険家モーリツ・ベンヨフスキーが四国および奄美大島に上陸しようとしたが、どの地でも追い返された。1790年にロンドンで出版された彼の『航海回想録』においてその時の日本人とのやり取りが生き生きと語られている⁵⁷。ロシア海軍提督のアーダム・ヨハン・フォン・クルーゼンシュテルンが世界一周の一環として長崎を訪れたが、同行していた使節ニコライ・レザノフによる交易の交渉が実らず、6か月間の滞在を経て余儀なくカムチャツカに戻った。長崎滞在中のクルーゼンシュテルンの見聞記が収録されている『1803年・1804年・1805年・1806年世界一周紀行』は1810年にサンクト・ペーテルスブルクでドイツ語で出版され、1813年にロンドンで英語版が刊行された⁵⁸。ロシア艦隊に同行していたドイツの博物学者ゲオルグ・ハインリッヒ・ランズドルフもまた独自に『1803年・1804年・1805年・1806年・1807年世界一周紀行』を著し、1812年にフランクフルト・アム・マインで出版した⁵⁹。同書は英語やオランダ語に訳され、クルーゼンシュテルンの航海記と同様にヨーロッパで広く読まれた⁶⁰。この他に、フランスの探検家ジャン・フランソワ・ラ・ペルーズによる千島列島の探検記を所収する『世界一周紀行』（パリ、1798年）⁶¹やイギリスの探検家バジル・ホールによる『朝鮮・琉球航海記』（ロンドン、1818年）⁶²もそれぞれ訪れた地域に関する貴重な観察記録をヨーロッパ読者に提供した。しかし、それらの航海記は異文化交流の興味深い場面を描いていたものの、日本を「外」から観察したものであり、日本文化に関する新しい情報はほとんど含んでいなかった。

世界一周の途中で日本に立ち寄ったことのある航海士達の中で、日本人や日本文化との親密

55 Onno Zwier van Haren: *Van Japan*, 1775.

56 Onno Zwier van Haren: *Recherches historiques*, 1778.

57 Maurice Auguste Benyowsky: *Memoirs and travels of Mauritius Augustus Count de Benyowsky*, 1790; *Reisen durch Sibirien und Kamtschatka über Japan und China nach Europa*, 1790; *Voyages et mémoires*, 1791; *Grefwens Mauritz August von Beniowskis Lefnadslopp och resor*, 1791.

58 Ivan Fedorovich Kruzenshtern: *Voyage round the world*, 1813; *Voyage autour du monde*, 1821.

59 Georg Heinrich von Langsdorff: *Bemerkungen auf einer Reise um die Welt*, 1812.

60 Georg Heinrich von Langsdorff: *Voyages and travels in various parts of the world*, 1813; *Reis rondom de wereld, in de jaren 1803 tot 1807*, 1818.

61 国際日本文化研究センターは英語版を所蔵している。Jean-François de Galaup La Pérouse: *A voyage round the world*, 1798.

62 Basil Hall: *Account of a voyage of discovery to the west coast of Corea, and the Great Loo-Choo Island*, 1818.

な交流の記録を残したのはヴァシリー・ゴローヴニンである。1811年に千島列島の測量を行っていたロシアの航海士ゴローヴニンは2年間北海道で幽閉され、その間に日本人と親交を深めた。ロシアに戻ってから、ゴローヴニンはその体験記『日本幽囚記』をロシア語で出版した⁶³。同書はすぐにドイツ語、そしてドイツ語からフランス語や英語、オランダ語などに訳され、ヨーロッパにおいて空前のベストセラーとなった⁶⁴。交易のために日本を開国させるべきであるとの声が西洋において高まる中で、同書における「内」から見た最新の日本情報はヨーロッパ諸国の知識人に重宝された。

19世紀に入ると、出島オランダ商館を媒介にした日本関連情報の出版が再び活発になる。出島オランダ商館長として1779年以降3度に渡って来日したイザーク・ティチングはケンペルに次いでヨーロッパにおける日本学の学問水準を高めた知識人である。ティチングの築き上げた日本学は日本で収集した資料および複数の日本の知識人との交流の上に成り立っていた。ティチングはバタフィア学芸協会の会員として、その学会誌に酒や醤油の醸造などに関する複数の論文や日本語の単語表を投稿した⁶⁵。また、ティチングによる日本の冠婚葬祭を中心とした日本研究に関する草稿の一部は彼の死後にパリにおいて出版者オーキュスト・ネヴェウによって出版され、後にロンドンで英語版が出された⁶⁶。ティチングより数代後の商館長でイギリスとの戦争の影響で長く日本に留まることになったヘンドリック・ドゥーフは通詞達と共に蘭日辞書を作成した。ドゥーフもまた帰国後に日本史を書き上げるべく多くの資料を日本から持ち帰ろうとしたが、帰りの船が難破したためそれらの資料はすべて海中に失われた。そのため、ドゥーフによる日本関連図書としては記憶を頼りに著された『日本回想録』（ハールレム、1833年）が出版されるのみに留まった⁶⁷。また、1826年から1830年に出島商館長を務めたジェルメイン・フェーリクス・メイランも日本について二冊の図書を刊行している。一冊は日欧貿易史について著されたものであり⁶⁸、もう一冊の『日本』（アムステルダム、1830年）は、メイランが長崎滞在中に見聞した日本の文化・社会についての事柄を概略的に記述したもので

63 国際日本文化研究センターは1819年版を所蔵している。Vasilii Mikhaïlovich Golovnin: *Сокращенный з аписку*, 1819.

64 Vasilii Mikhaïlovich Golovnin: *Mijne lotgevallen in mijne gevangenschap bij de Japanners*, 1817; *Narrative of my captivity in Japan*, 1818; *Voyage de M. Golovnin*, 1818; *Begebenheiten des Capitains von der russisch-kaiserlichen Marine Golownin, in der Gefangenschaft bei den Japanern in den Jahren 1811, 1812 und 1813*, 1818; *Begivenheder hændede Golownin i hans Fangenskab hos Japanerne I Aarene 1811. 1812 og 1813*, 1818; *Recollections of Japan*, 1819; *Memoirs of a captivity in Japan*, 1824; *Japan and the Japanese*, 1852.

65 Bataviaasch Genootschap der Kunsten en Wetenschappen: *Verhandelingen*, 1779.

66 Isaac Titsingh: *Cérémonies usitées au Japon, pour les mariages et les funérailles*, 1819; *Mémoires et anecdotes sur la dynastie régnante des Djogouns*, 1820; *Cérémonies usitées au Japon*, 1822; *Illustrations of Japan*, 1822; *Bijzonderheden over Japan*, 1824.

67 Hendrik Doeff: *Herinneringen uit Japan*, 1833.

68 国際日本文化研究センター未所蔵。

ある⁶⁹。同じ1820年代に出島オランダ商館に倉庫係として勤務していたヨーハン・ファン・オーフェルメール・フィッセルもまた日本文化を民俗学的観点から記述した『日本風俗備考』を刊行している⁷⁰。

これらの19世紀前半に出版された旅行記を初めとする日本関連記述を含む数多くの著作や研究書は、日本文化に関していくつかの側面において新たな情報を提供してくれるものの、ケンペル『日本史』に取って代わるような包括的な「日本誌」にまで発展するには至らなかった。この役割を果たしたのはフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの大著『日本』（ライデン、1832年～1852年）である⁷¹。シーボルトは、オランダ領東インド（現インドネシア）のファン・デル・カペッレン総督による極東貿易活性化政策の一環として、1823から1830年に、出島オランダ商館の外科医として日本の博物学的・民俗学的調査を行った。シーボルトは滞在中に収集した膨大な文物資料をオランダに持ち帰り、それらを元に日本の地理・民俗・歴史・宗教・動植物などに関する学術出版を手掛けた。また、それらの資料の整理・研究においてシーボルトを補佐したドイツ人の文献学者ヨハン・ヨゼフ・ホフマンはその経験を生かし、1855年にライデン大学の日本学教授となった。これをもって、日本学はヨーロッパにおいて初めて個人の域を超えて、大学における組織的研究分野に発展した。

西洋古版日本地図出版史

ポルトガル人がアジアに進出し、16世紀の半ば頃に日本に到着してから、日本についての地理的情報は最初に旅行記などの形で西洋に伝達された。そして、これらの情報を元に、西洋においていくつかの日本地図が作製されていたが、詳細な地理的情報の欠如により、それらの地図は粗雑なものであり、多くの場合、日本は一つの円形としてごく簡略な形にしか表現されていなかった⁷²。

西洋において作製された初めての本格的な日本地図は、1595年にアーブラハム・オルテリウスの地図帳に所収されたポルトガルの地図制作者ルイス・テイセイラによるものであった⁷³。同地図は、日本に渡航したポルトガル人からの情報に加えて、日本から持ち帰られた行基式日

69 Germain Felix Meylan: *Japan*, 1830.

70 J. F. van Overmeer Fisscher: *Bijdrage tot de kennis van het Japansche rijk*, 1833.

71 Philipp Franz von Siebold: *Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben- und Schutzländern*, 1852.

72 例えば、Sebastian Münster: *Das erst general, inhaltend die beschreibung und den circkel des gantzen erdtreichs und möres*, c1550.

73 国際日本文化研究センターは1606年版を所蔵している。Abraham Ortelius: *Japoniae insulae descriptio*, 1606.

本図などのような日本製の地図をも参照して作成されたと思われる。同地図は17世紀前半における日本地図の原型となり、多くの模写が作成された⁷⁴。また、同時代の世界地図においても日本の地形としてテイセイラの地図の図形が用いられていた⁷⁵。

17世紀半ば以降、アジアからもたらされた新しい情報を元に西洋で作成される日本地図は少しずつ変遷していき、いくつかのパターンが出来上がった。オランダの地図製作者ヨアネス・ヤンソニウスの日本地図は、テイセイラの地図に東インド会社の素図における地理情報が盛り込まれている⁷⁶。また、オランダ東インド会社の公認地図製作者であったヨアン・ブラウの日本地図には東インド会社の素図の他に中国に滞在していたイエズス会士マルティノ・マルティーニから得た情報も付け加えられている⁷⁷。

18世紀になると、オランダ東インド会社の職員が持ち帰った日本製の地図が西洋における日本地図製作の直接的な模範となる。ユトレヒトで出版されたアドリアーン・レランドの日本地図は、石川流宣の「日本海山潮陸図」から地名の漢字表記を含めて忠実に転写されている⁷⁸。また、1690年～1692年に日本に滞在していた医師で博物学者でもあったエンゲルベルト・ケンペルも複数の日本製の地図を持ち帰り、それらの地図の情報を元に作成された新しい日本地図が『日本史』（ロンドン、1727年）に掲載され、イザーク・ティリオンやジャック・ニコラ・ベリンなどによって模写された⁷⁹。

このケンペル『日本史』所収の日本地図はフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト『日本』の出版まで日本地図の標準として広く用いられていた。シーボルトは1823年～1829年に日本に滞在した時に多くの地図を収集した。シーボルトが幕府天文方高橋景保から入手したこれらの日本製の地図は、伊能忠敬や間宮林蔵の測量に基づく正確な観測方法によるものであり、これにシーボルトが西洋の測量方法に適合させるための修正を加えた上で、新たな日本地図として1852年にライデンで出版された⁸⁰。シーボルトの日本地図の出版以降、西洋における日本地図製作は科学的領域に入り、現代の日本地図に近い形となった。

74 Jodocus Hondius: *Japonia*, 1606; Johannes Janssonius: *Japonia Nova Descriptio*, 1636.

75 Jodocus Hondius: *Asiae nova descriptio*, c1619; Willem Janszoon Blaeu: *Asia noviter delineata*, c1635; Henricus Hondius: *Asia recens summa cura delineata*, 1641.

76 Johannes Janssonius: *Japonia et Terra Eso*, 1651; Johannes Janssonius: *Nova et accurata Japoniae Terrae Esonis, ac insularum adjacentium*, c1658.

77 Joan Blaeu: *Japonia Regnum*, 1655.

78 Adriaan Reland: *Imperium Japonicum*, 1740.

79 Engelbert Kaempfer: *Het koninkryk Japan*, 1735; Isaak Tirion: *Carta accurata dell'Imperio del Giappone*, 1738; Jacques Nicolas Bellin: *Carte de l'Empire du Japon*, 1752.

80 Philipp Franz von Siebold: *Nippon. Archiv zur Beschreibung von Japan und dessen Neben-und Schutzländern*, 1852.